

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2012

課題番号：23652051

研究課題名（和文） 物語書写史の構築に関する基礎的研究

研究課題名（英文） A basic study on the construction of the Monogatari Shosha history

研究代表者

大内 英範 (OUCHI HIDENORI)

東京大学・史料編纂所・特任助教

研究者番号：60462173

研究成果の概要（和文）：研究期間のあいだ、室町期（一部鎌倉期）の源氏物語写本について複製資料および現物資料による調査および各種目録類による調査を進め、基礎資料となる写本・書写者リストの充実に努めた。書写者についての情報収集は順調に進み、かなりの情報を蓄積することができた。書写者に注目した文化ネットワークについてコンピュータ上で可視化する方法については、情報学系の成果から有力な手法を見出すことができた。具現化の方法については引き続き今後の課題としたい。

研究成果の概要（英文）：During the study period, I made the list of copyist and manuscripts to advance the study of the Tale of Genji manuscript that has been transcribed in Muromachi period. It is the underlying data. I was able to gather information about the copyist proceeded smoothly, to accumulate a lot of information. For information about how to visualize on a computer about the cultural network that have focused on the copyist, it was possible to find a powerful tool from the results of information science system. I want to challenge for the future will continue to learn how to embody.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：古代文学、源氏物語

1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』の本文については、昭和初期の池田亀鑑博士による研究およびその成果である『校異源氏物語』『源氏物語大成』を無批判に受け入れ、古代学協会蔵大島本の本文を本文批判しないままに読み、作品論を展開する研究が続いている。本課題研究代表者の学位論文（『源氏物語鎌倉期本文の研究』（19年3月。のち22年5月に公刊）では、そのような風潮に疑義を唱えた伊井春樹氏、伊藤鉄也氏の研究を発展させる形で、ほぼ手つかずであった鎌倉期写本を徹底的に調査研究し、藤原定家以前の本文の痕跡、河内本

本文の生成過程など、これまでよくわかっていなかった鎌倉期の『源氏物語』本文に関する多くの成果をあげた。

上記のように鎌倉期の本文に関しては多くのことを明らかにし得たが、「本文」や「写本」についてはとまかく、「書写者」に関する研究まではなかなか至らなかった。

一方、南北朝から室町期の『源氏物語』写本においては、数巻ずつ数人に分担させて書写することがよく行われた。それは54巻もある長大な作品を効率的に再生産するための一方法であっただろう。あわせて、奥書や書写目録といったものに書写者の情報が残

されていたり、古筆見による鑑定なども鎌倉期のものにくらべてかなり精度が高いといえ、「書写者」の特定が比較的容易である。この時代の写本を研究対象とすることで、物語の「書写」及びそれに関する文化的なネットワークについての一定の知見が得られるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、将来的に構想する「物語書写史の構築」に向けての基礎的な調査・研究である。『伊勢物語』や『源氏物語』といった古物語が現在に伝わったのは、多くの人によって書写されたからである。しかし、「書写」とひと口にいつても、その実態はさまざまであったはずである。現在に残された写本からなるべく多くの情報を読み取り、書写の実態を明らかにして、「物語書写史」とでもいべきものを構築したい。

一般に、『源氏物語』をはじめとする物語の写本について、誰が、いつごろ書写したもので、本文は大島本と比較して近い・遠いといったことだけが調べられてきた。本研究では、寄合書の『源氏物語』1セットの書写者グループを、その書写グループであるという点の共起性に注目する。そうした事例を多く調査収集し、『源氏物語』の「書写」という視点で見た文化ネットワークとして定義してみたいのである。

これまでこのような視点での研究はなく、ただ「古今伝授」や秘説の伝授に象徴される学派ないし学統の視点でしか考えられてこなかった。

しかし、54もの巻からなる大作『源氏物語』を数人で分担書写するのは、まさに『源氏物語』再生産のための共同作業そのものである。もちろん、書写者が一堂に会して書写を行うわけではないが、依頼者は何らかの基準でその「数人」に分担書写の依頼をしているのであり、彼らはその作業を通して同じ文化的まとまりの中に属しているということが出来る。

その文化的まとまりを1つずつ明らかにし、既述のように最終的には『源氏物語』の「書写」という視点で見た文化ネットワークとして定義したいのである。これはこれまでにならなかつた新しい着想といえる。そのために、本研究では中世、特に南北朝から室町期に書写された『源氏物語』写本の書写者を調査研究し、当時の文化ネットワークを明らかにすることで、将来的な研究課題の基礎となるようにしたいと考えている。

繰り返しになるが、対象を南北朝から室町期の寄合書の『源氏物語』写本にしぼり、書写者の一覧および略歴を整理して、その『源氏物語』の「書写」という点においての共起性を手掛かりに、次の2点について解明する

ことが本課題の目的である。

- ・『源氏物語』の「書写」という視点での文化ネットワークを想定し、そのいくつかを解明する。
- ・上記「文化ネットワーク」と歴史史料とを比較し、その相違を明らかにする。

3. 研究の方法

概略、以下のような方法による。まず調査研究対象を南北朝から室町期書写の『源氏物語』写本を対象をしぼる。その上で、書写者をあきらかにできる寄合書の写本を調べ、巻ごとの書写者一覧表を作成する。『源氏物語』1セットの書写を1単位としていくつかの事例を収集し、文化ネットワークを想定する。また、各書写者について史料編纂所のデータベースを駆使するなどして略歴をまとめ、書写の背景にある事情などを総合的に考察する。

『源氏物語』写本の情報については、さまざまなものがある。影印・翻刻は主要写本を中心に多数刊行されており、20年の「源氏物語千年紀」によりその点数がかなり増加している。校本類も池田亀鑑氏の『源氏物語大成』（中央公論社 昭和28～31）や『源氏物語別本集成 正統』（刊行会編 おうふう 昭和63～）、『河内本源氏物語校異集成』（加藤洋介 風間書房 平成13）などがある。そのほか影印や翻刻、論文などによる解題も多数ある。ただ、写本の情報のある程度網羅的に一覧できるようなものとしては『源氏物語に関する展覧書目録』（東京帝国大学文学部国文学研究室 昭和7）、「現存重要諸本の解説」（『大成 研究篇』）、大津有一「諸本解題」（『源氏物語事典』池田亀鑑編 東京堂 昭和35）など古いものばかりである。インターネットには「古典籍総合目録」（国文学研究資料館 web サイト）などの資料もあるが、情報不足で物足りないし、wikipediaにも写本の一覧はあるが、学術リソースとしての信頼性・権威性に問題があつて積極的な利用はためられない。最近の研究成果をとりこんだ信頼できる最新の写本一覧がないのである。

したがって、上記にあげた各種資料を個別にあたるほか、大学図書館等の目録や古書即売会のカタログ等、写本の情報が含まれていそうなものについて、できる限り網羅的にあたることとした。

書写者については、各種辞典類、さまざまな注釈等をあつたが、もっとも有用だったのは東京大学史料編纂所のデータベースであった。ヒットした情報を書写者別に年表形式で、おおよその履歴や活躍内容を視覚的にわかりやすく整理することとした。同時に、同一情報中に登場する他の人物についても記録することで、ある人物に関する史料上認められるネットワークを確認する基礎資料

とする。

最後に、ある寄合書写本の書写者グループを1つの文化ネットワークと定義し、コンピュータ上で視覚化する。前記史料上のネットワークと比較し、一致点、相違点を抽出する。

4. 研究成果

本研究の目的とするところは、特に南北朝から室町期に書写された『源氏物語』写本の書写者を調査研究し、当時の文化的なネットワークを明らかにすることである。そのために、書写者があきらかな寄合書の写本とその書写者の一覧表の作成、および書写者ごとの略歴をまとめ、コンピュータ上で書写者どうしのつながりを可視化することが必要である。

二年の研究期間のあいだ、室町期（一部鎌倉期）の源氏物語写本について国文学研究資料館等におけるマイクロフィルム・紙焼き資料による調査および各種目録類による調査を進め、写本・書写者リストの充実に努めた。

大学図書館の蔵書目録等に記されている書誌情報が思いのほか簡潔なものが多く、書写者どころか年代の特定すら難しいものが多かった。しかし、国文学研究資料館にマイクロフィルムが所蔵されている場合、インターネット上に画像が公開されている場合など、ある程度の数の写本については現地足を運ぶことなく確認することができた。

あわせて紙焼き資料や影印・複製等の本文資料数点を購入し、分析・検討した。さらに、鹿児島大学附属図書館、天理大学附属天理図書館において写本の实地調査を行なった。

鹿児島大学附属図書館で調査した玉里文庫本については、2種のうち15冊本については、その空蟬巻について、本文生成の過程を推測し、論文とした（25年7月刊行予定、後掲・雑誌論文(4)）。残る1種についても極めて精緻な調査を行った。この写本はこれまで一つの寄合書写本と思われていたが、調査の結果、複数写本の取り合わせの可能性を排除できなかった。なお精密な調査が必要であり、本課題の研究期間中に結論を得ることができなかった。今後もなんらかの形で研究・検討を重ね、いずれ報告の機会を持ちたいと考えている。

また、他経費にて訪問した機関において得た源氏物語古筆切および写本の情報についても、調査・検討した。特にベルリン国立図書館で調査した室町後期写本は、幕末のプロイセン使節団が持ち帰ったという伝来の面白さとともに、無数の興味深い本文を有していた。今後注目されることになる写本であろう。この写本については論文を発表した（後掲・雑誌論文(2)）。また、イェール大学バイネキ図書館で調査した手鑑帖にも断片であるが源氏物語の本文資料が見られた。この手

鑑帖については、同図書館で行われたワークショップで調査報告を行った（後掲・学会発表(5)）。ほかに、仁和寺においても手鑑の調査を行った。同手鑑中の源氏物語古筆切について、すでに紹介されている『古筆学大成』中の書誌データが誤っていることを確認した。いずれ発表の機会を得る予定である。

上記のような調査・研究によって作成された写本・書写者リストについては、今後の源氏物語研究にとって重要な基礎資料になるはずである。さらに拡充をはかり、いずれ広く研究者間で共有できるようにしたいと考えている。

なお、本研究課題では一つの寄合書写本の書写者という共起性に注目して、文化ネットワークを考えることを想定していた。しかし前述のように、たとえば鹿児島大学附属図書館で实地調査した写本はこれまで一つの寄合書写本と考えられていたが、精緻な分析の結果、複数の写本の取り合わせの可能性を否定できなかった。したがって、他の写本についても、一つの寄合書写本と認めうるかどうか、再調査が必要かもしれないという問題点を認めた。書写者についての情報収集・整理については、特に複数の写本の書写者となっている人物を中心に、東京大学史料編纂所の公開データベースの検索を中心として進めた。これは順調に進み、かなりの情報を蓄積することができたが、やはり人物によって情報量の多寡の差が激しく、最終的に整理の方法をつめきることができなかった。ただ、前述の文化ネットワークについてコンピュータ上で可視化する方法については、情報学系の成果から有力な手法を見出すことができた。具現化の方法および発表の機会については引き続き今後の検討課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

(1) 大内英範, Hi-CAT Plus: デジタル史料の検索・閲覧システム, 情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 査読無, Vol.2011 No.8, 2011, 105~110,

(2) 大内英範, ベルリン国立図書館所蔵の源氏物語写本について, 國文學論輯, 無, 34, 2013, 23-36,

(3) 大内英範, 仁和寺蔵・覚道筆『灌頂記(私)』紙背和歌について, 東京大学史料編纂所研究紀要, 無, 23, 2013, 160-167,

(4) 大内英範, 「青表紙本」が揺らいだ後, 文学語学, 無, 206, 2013, (ページ未定)

〔学会発表〕（計 6 件）

(1)大内英範,史料編纂所の DB とデジタルアーカイブ,国文学研究資料館特定研究「日本文学関連電子資料の構成・利用の研究」研究会,2011年7月27日,国文学研究資料館（東京都）

(2)大内英範,史料編纂所の公開 DB とデジタルアーカイブ (Databases and the Digital Archive of the Historiographical Institute),European Association of Japanese Resource Specialists（日本資料専門家欧州協会）,2011年9月8日,Newcastle 大学（英国）

(3)大内英範,Hi-CAT Plus: デジタル史料の検索・閲覧システム,情報処理学会・人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2011」,2011年12月10日,龍谷大学

(4)大内英範,失われたら終わり～デジタルアーカイブへの（勝手な）期待,ワークショップ～Digital Archive Networkの構築に向けて～,2012年7月24日,札幌市中央図書館（北海道）

(5)大内英範,Tekagamijo, YAJ5b0 手鑑帖について,イェール大学バイネキ図書館ワークショップ,2012年10月5日,イェール大学バイネキ図書館（アメリカ合衆国）

(6)大内英範,原本所蔵者との複製デジタル史料共有システムについて,第44回デジタル図書館ワークショップ,2013年3月14日,九州大学附属図書館（福岡県）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大内 英範 (OUCHI HIDENORI)
東京大学・史料編纂所・特任助教
研究者番号：60462173

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし